

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	恐竜の時代を想像しよう : 想像文を書く
Author(s)	長浜, 博
Citation	児童の言語生態研究 , 17 : 48 - 56
Issue Date	2009-07-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045206
Right	
Relation	



国語の授業はこうする

5年生・構え

恐竜の時代を想像しよう

想像文を書く

教材…『日本の恐竜時代』東洋一（学校図書五年上）

長 浜 博

1 はじめに

学習指導要領には、五・六年生において「目的や意図などに応じて、文章の内容を的確に押えながら要旨をとらえること」とある。しかし、そもそも「文章の内容を的確に押える」「要旨をとらえる」とはどういうことなのか、ずっと疑問に思い続けてきたことがある。今まで、「接続語や指示語に気をつけて読む」「文末に気をつけて読む」「つながりやまとまりに注意して読む」「叙述の仕方工夫しているところに注意して読む」といったやり方を工夫してきたつもりだが、技術的な指導に陥りがちで、子どもたちの内面に迫る授業がなかなかできなかったように感じる。

2

想像文を書く

そもそも子どもたちはどのような意識を持って説明文を読んでいるのだろうか。今回は、その「子どもたちの意識」に焦点を当て、説明文を読むときの自分の意識の向け方に気づかせてみたいと考えた。文章に対する自分の意識の向け方に気づくことが、要旨をとらえるために大きな意味を持つと考えたからである。

まず、教材文に関連した文（想像文）を自作させる。ここで、筆者の文章や、その中に出てくるキーワードにこだわる子は、それらのことをヒントにして忠実に想像文を展開していくであろうし、そうでない子は、違った

展開をしていくと思われる。つまり、ここで子どもたちは、自分の想像文の書き方を示すだけでなく、筆者の教材文を読む読み方も示していると考えられる。そして、筆者の書き方との違いにも意識を向け、それがひいては「筆者の考えをつかむ」ことにつながり、「要旨」をとらえることになるのではないだろうか。

この教材は、「発見すること」「発見されたものを調べること（事実確認）」「発見されたものをもとに想像すること」「調べ、想像すること（未来を展望すること）」という流れで読み進めていくことになる。特に、筆者の意見は、「発見されたものをできるだけ正確に分析する冷静さ」と「発見されたものをもとにして、当時のことを想像する想像力」があつて初めて導き出されるものである。そ

ういう意味で、「これらの化石の発見からどんなことが想像できるのか」ということを子どもたちに考えさせることは、筆者の意見を理解し、この教材の要旨を理解するためにも意味があることだと考える。

具体的には、十段落に「『恐竜が生活していた当時の様子を想像してみよう』とあるので、そのあとの筆者の文章（十一段落）を見せずに、子どもたち一人一人に想像させてみる。ここで、子どもたちがどんな想像文を書くか、いくつかの型に分類されることが予想される。

ア 条件忠実型（正しい読み取り型）

「恐竜」などの化石をヒントに前文と合うように書く場合。

イ 条件ふくらまし型（豊かな読み取り型）

イメージをふくらませて、いろいろと取り混ぜて書く場合。

ウ 条件無視型（自己中心的な読み取り型）

条件的なことを無視して自由奔放に書く場合。

エ 条件無用型（貧しい読み取り型）

想像文そのものを自分のイメージを持って書けない場合。

アは、キーワードにこだわる子が書く想像文のタイプと言える。筆者の言おうとしてい

ることを理解できる構えができていると思われるが、想像力を働かせて筆者の要旨に迫ることができずかどうかは疑問である。

イは、キーワードをもとにしてイメージをふくらませる子が書く想像文と言える。

①より優れていると言える。おそらく筆者の要旨にいちばん近づけるのではないだろうか。

ウは、キーワードを無視して自分勝手に想像の世界を展開してしまう子が書く想像文と言える。自己中心的に文章を読み取り易いタイプと言えるが、感性が鋭く想像力が豊かだと言える。

エは、文章を読んだり書いたりする構えそのものができていない子が書く想像文と言える。このような子は、さまざまな型の想像文を示すことでフォローしていききたいものである。

なお、ここにはない型が出てくることも予想されるが、気をつけなければならないのは、どの型が正しくて、どの型が間違っているというような意識でとらえさせないということである。ここでの目的は、あくまで「想像文を書く（説明文を理解する）」ということにおいて意識をどう向けているかに気づくことであるからである。

（教材文） 日本の恐竜時代

①昭和五十七（一九八二）年、当時中学二年生だった松田亜規さんは、石川県白峰村桑島にある「化石壁」に家族でドライブに行きました。その時、かべの前の道路に落ちていた、黒々としたきれいな石を拾いました。

②数日後、そのとき集めた石を整理していて、そのうちの一つをうっかり落としておっしまいました。ところがなんと、われた石の中から、肉食恐竜の歯の化石が見つかったのです。

③今から約一億年前、地球は全体的に温だんで、恐竜が地球上に大はん栄をしていました。その中には六階建てのビルくらいもある体の大きな恐竜もいれば、ニワトリほどの小さな恐竜もいました。今では、恐竜は、北極や南極をふくめた地球上のあらゆる所で生きていたことが分かっています。

④日本でも、昭和五十四（一九七九）年に、わが国最初の恐竜化石が岩手県で発見されると、次々に各地で恐竜がすんでいた証である化石が発見されるようになりました。

⑤今では、北海道から九州まで、恐竜が生息

していた時代の中生代（約二億五千万年前から六千五百万年前までの間）の地層から、たくさんの恐竜化石が発見されています。

⑥ その中でも、北陸地方は最も多くの恐竜化石が発見されている地いきです。北陸地方には、手取層群とよばれる中生代の地層が広がっています。松田さんが化石を発見したのもこの地層からでした。この発見がきっかけとなって、発くつ調査が行われるようになったのです。

⑦ 福井県勝山市の山中では、大がかりな恐竜化石発くつ調査が、平成元年からけい続的に行われています。この発くつの結果、肉食恐竜や草食恐竜の骨や歯の化石を多数発見することができました。

⑧ 肉食恐竜では、全長が四メートルで前足に大きなすだいかぎづめを持ったものが見つかりました。草食恐竜では、イグアノドンの仲間の頭骨やせ骨などが多数発くつされました。このイグアノドンの仲間の恐竜は、ばらばらに見つかった骨から全身の復元が行われ、全長が約五メートルの大きさであったことが分かりました。さらに竜きやく類という、体の大きい草食恐竜のそん在も明らかになりました。一方、発くつされているのは恐竜だけではありません。恐竜といっしょに生活していた、ワニや

カメなどのせきつい動物たちの骨もたくさん採集されています。

⑨ 興味深いのは、恐竜や鳥類などの足あとの化石も同じ発くつ現場で発くつされたことです。足あとの化石は、恐竜やワニやカメ、鳥類などのせきつい動物たちが、発くつされたその場所で生活していたことを示しています。また、足あと群の中に大きなじゅ木の根の化石もあり、恐竜が生きていた当時の周囲のかん境も分かります。

⑩ これらの発見された数々の化石から、恐竜が生活していた当時の様子を想像してみましよう。

⑪ 手取層群が広がっている場所には、川が流れ、湖や沼があります。その周辺には、シダ・ソテツの仲間やイチヨウなどの森林がしげつています。今度は動物たちを見てみましょう。森林の中には、こん虫やテドリリュウなどの小型の動物が動き回っています。川や湖やぬまの周辺には、鳥やワニなどがいます。イグアノドンの仲間も群れを作って生活しています。彼らは時々、肉食恐竜たちにおそわれていたようです。発くつされているイグアノドンの骨の化石には、肉食恐竜がかみついた歯のあとが残されているものがあるからです。大きなイグアノドンも、肉食恐竜にはたじたじたったようです。

⑫ このように、当時の手取層群にはさまざまな生き物がくらしている、豊かな自然がありました。発くつされた恐竜などの化石は、その時の様子をあざやかに物語ってくれるのです。

⑬ ところで、恐竜時代には日本海はまだなく、現在の北陸地方はアジア大陸の東の外れにありました。そのため、北陸地方の恐竜たちは、大陸の内部へも自由に移動できたのかもしれませんが。一億年以上前の太古の時代、たくさんの恐竜の群れが移動する様子を想像してみてください。きつと、みなさんを恐竜時代にタイムスリップさせてくれるでしょう。

⑭ 恐竜は、今から約六千五百万年前に絶滅つしてしまったと考えられています。しかし、恐竜たちは今、化石となってわたしたちの目の前によみがえつてきています。そして、生きていたときのすがたや様子だけでなく、その時代の豊かな自然の様子までも教えてくれています。

⑮ これからも、手取層群からはいろいろな化石が発くつされることでしょう。そして、それらの化石から、恐竜たちがはん榮していた当時のかん境やかからの絶めつつの原因を調べることができるでしょう。そしてそれは、わたしたちに、当時のことをよりくわしく教えてくれると同時に、地球の未来

を考えるときの手がかりをあたえてくれるにちがひありません。

(学校図書 東洋一)

3

指導計画

「二～四時間目」

一段落から九段落を読み、話題をつかんだり要点をまとめたりする。

「五時間目」

十段落の「当時の様子を想像してみましよう。」を受け、各自に想像させて想像文を書く。

「六時間目(本時)」

書いた想像文を発表し、想像文の型分けをする。また、自分の型が分かり、読み方や書き方の違いに気づく。

「七～九時間目」

自分の要旨をまとめたり、筆者の要旨と比べてりする。

4

授業の展開

(1)書いた想像文を提示して、それぞれの想像

文の書き方の違いを考える(導入)。

T みなさんが想像文を書いてくれました。今日は、その中のいくつかを発表します。

いろいろな草や木があつて、それを草食恐竜が食べていて、そこに肉食恐竜がやつてきて、草食恐竜の一部は逃げられたけれど、何匹かは逃げられずにつかまって殺されてしまう。水の中に住む恐竜は、アンモナイトなどを食べて、肉食恐竜におそれるようになった時は、水の中に入って身を守ってやりすごす。

ほかにもせきつい動物などがいて、争ったり食べたりして生きている。せきつい動物の中には、現代でも生きている動物がいる。たとえば、ゴキブリ・ワニ・カメなどがいる。

今では、比べものにならないほどいっぱい自然があつて、空気もいいし、空気がきれいな世界だと思ふ。(資料①)

自然がたくさんあつて、そこにある小さな丘や山などの上に恐竜がいる。そして、池や湖が地面にあつて、そこには、海の中でくらしている恐竜たちがいたり、ワニやカメが住んでいたりする。木もたくさんあつて、森や林がたくさんあ

る。空には鳥のように飛べる恐竜や動物なども飛んでいる。

草食恐竜は、草を食べてゆっくりなごやかにくらしている、肉食恐竜は、ほかの恐竜や動物を追いかけて争いごとをしていたりもする。

昔にしか咲いていなかった、きれいでめずらしい花もちよつと咲いている。いろいろな色の恐竜がいて、とてもはなやか。とつても大きくて強くてこわそうな恐竜もいるし、あんまり大きくなくてやさしそうでかわいい恐竜もいる。(資料②)

ステゴサウルスが草むらの草を食べている。その後ろで、ティラノサウルスが、えものをさがしてうろろろしていたり、つかまえようと走っていたり、とふんとうしている。

わたしは、上れない木の上に、小鳥のようにすわっていた。トンボやバッタのせんだなどもいるのだろうか。木の上からいろいろなところを見ると楽しい。今度は、海の中に入っていた。息ができる。そのことを確認して出発。

アンモナイトがたくさんいた。貝やエビ、カニもいて、とてもいいながめだつ

た。そして、もどろろとすると、頭がくらくらしてきて元の場所にいた。感想は、とつても楽しかった。(資料③)

T この三つの想像文をよく見比べてください。見比べてみて、似ているところや違っているところがあったら発表しましょう。

C 周りの環境とか自然について書いてあるところが共通している。

C 想像文①は、せきつい動物の例を挙げていて、③では、①と②では出ていない水の中のことが書いてあって、②では、最後に自分が思ったことを書いている。

C 最初に、「見つけた化石を思い出して」ってというのがあったけれど、その化石とつながりがあるようなことが書けている。

T 今、思ったことが書けている文章がありますって言うてくれた。何番の文章かな。

C 想像文②。
T どの部分ですか。

C 「とつても大きくて強くてこわそうな恐竜もいるし、あんまり大きくなくてやさしそうでかわいい恐竜もいる。」というところ。

C 「きれいでめずらしい」とか「とてもはなやか」。

C 「感想は、とつても楽しかった」というところ。

C 「トンボやバッタのせせんなどもいるのだろうか。」

C 「いろいろなところを見ると楽しい」。

C 「貝やエビ、カニもいてとてもいいながめだった」。

◇ ◇ ◇
(思ったこと、感じたこととして指摘された言葉に赤いマークをつける。)

(2) ①の想像文のポイントを考える。

(展開①)

T ②や③には思ったことか感じたことがたくさん入っているね。ところで、①はどうですか？ ①の文章のいいところってどんなところだと思う？

C 説明文みたいで、恐竜時代のことをくわしく書いている。

T どのなところがくわしく感じましたか？

C せきつい動物の、争って食べていたところとか、せきつい動物の中の種類とか、くわしい名前を挙げている。
C 恐竜がどんなときにどんな行動をとつ

たかという動きがくわしく書いてある。

C いろいろな恐竜とか動物の食べ物みたいなもの。たとえば、肉食恐竜なら草や木で、肉食恐竜なら肉食恐竜で、せきつい動物とかは争い合って食べたりしている。

C 今言ったことは、弱肉強食ということの証拠の部分。

T 弱肉強食って何？

C 強いものが弱いものを食べるっていうこと。

T ただ肉食恐竜が登場して肉食恐竜が登場して終わるのではなくて、肉食恐竜が肉食恐竜を食べるという動きを説明することで、弱肉強食なんっていう、そういう世界まで想像させてくれる。

C この想像文を書くときのキーワードは、せきつい動物の化石であり、肉食恐竜の化石であり、肉食恐竜の化石だつたんだね。だから、そのことにたいへん忠実にくわしくまとめてくれたと言っているかな。思ったことか感じたことが少ししか出ていないけれど、きちんと説明してくれているよね。そこがいいよね。でもね、先生は②も③もいいと思うんです。②のいいところはどんなところだろう。

(3) ②と③の想像文のポイントを考える。

(展開②)

C 肉食恐竜とか、草食恐竜とかの生きていた生活の様子を書いている。

C むかしの環境みたいなことがよく書かれている。

C 木がたくさんあって、森や林がたくさんある。

C 想像文①のくわしい説明文のようなものに付け加えて、自分の想像を織り交ぜて書いている。

C 赤いマークの貼ってあるところのあたりが、①と違う。

T こういうのが入ると、なんでくわしいと感ずるんだろう。

C 説明のことだけじゃなくて、自分の思ったこととかもくわしく書いてあるから。

T 思ったことが入るからくわしいというだけではなくて？

C 分かりやすい。

C 想像の世界が広がる。

T ただくわしく説明されていて何があるか分かるだけじゃなくて、広がりを感じてる。深さと言ってもいいかもしれない。じゃあ、③のよさもみんな再発見しよう。

C ①や②とは違って、自分のやっている

こととか、自分が行ったところとか、自分のことをいろいろ書いている。

C 自分を登場させた。

C この文は、説明文というよりも物語文みたい。

C 説明ばかりじゃなくて、感想とかそういうものが出てくるから物語文のようになる。

C 恐竜だけの話じゃなくて、自分の話っていうか、自分が本当にあったこととかを書いている。

C 想像文①とか②とかは、最後のほうに感想とかいろいろ思っていることを書いておけるけれど、③は、途中でいろいろ想像とかしている。

C 「今度は、海の中に入っていた。息ができる。そのことを確認して出発」って、関係ないことが入っていてドラマチック。

C 完全に想像の世界にはまり込んでいて、自意識過剰っていう感じ。

T さあ、ずいぶんみんなそれぞれの文章のよさに気がついてくれたんだけれど、みんなおもしろいと思わないかな。最初はみんな同じスタートでしょう。十段落にあったね。

T 「これらの発見された数々の化石から、恐竜が生活していた当時の様子を想像

してみましょう。」

まったく同じ条件の中でスタートしたら、みんなが想像してくれた世界は、説明的に書いてくれた人がいたかと思うと、説明文を、思ったこととかを人れながら書いてくれた人もいる。一方では、そんなことお構いなしで、想像の世界をいっぱい広げてくれた人もいます。ここで、みんなに極めつけの想像文を見せたいと思います。(想像文④を黒板に掲示する。)

広い野原の草の上で、ニワトリぐらいの大きさの恐竜がたくさんいて、楽しく遊んでいました。野原の草を食べていた草食動物を、肉が大好きな肉食動物が三匹ぐらいでおそって食べていました。それを見たニワトリぐらいの大きさの恐竜はあわててにげていきました。肉食恐竜は、荒地に住んでいました。空から天使がまいおりてきました。天使は、肉食恐竜たちに向かって言いました。
「これ以上恐竜を食べると、この世のみんなを石にします。」
恐竜たちは、いつもいつも草を食べ続けたので、とうとうあきてしまいました。

ある日、一頭の肉食恐竜が、草食恐竜

の肉をねらっていました。肉食恐竜は、もともと天使のことなんて信じていませんでした。とうとうがまんできなくなつて、草食恐竜を食べてしまいました。食べたしゅんかん、パーツと光がきて、時間が止まったように、みんな石になつてしまいました。今の化石は、天使が天ばつとして恐竜を石にしてしまったのがきっかけです。

(資料④)

(4) ④の想像文のポイントを考える。

(展開③)

- T みんなの感想はどうですか。
 C この想像文を書いた人は、自分でなにに説つていうのを作っている。
 C これはもう説明文とかそういうのじゃなくて、完全な物語で、自分でもう歴史を作っちゃっている。
 C 想像しすぎっていう感じ。
 T ③の想像の文と比べてどう？
 C ③の場合、自分が冒険しているっていう感じだったけれど、この文は、そういうことではなくて、物語を作つたっていう感じがする。
 C 想像文③の文より、自分たちがタイムスリップして書いたんじゃないかって、なにか昔からある物語みたいな感じがした。

C 本当に中生代にはありえないことを想像して書いているから、本当にこれこそドラマチックな感じがする。

C ①よりも②の方がけっこう想像していて、②よりも③の方がもっと想像していて、③よりも④の方がもっと想像している。

(5) 想像文の書き方にはそれぞれタイプがあり、自分がどのタイプの書き方をしていたか気づく。

(まとめ)

T 今、うまくまとめられてくれたけれど、①②③④と行くに従つて想像の世界がどんどん広がっていったね。始まりは説明文の化石の発見だった。そこから想像しなさいと言ったら、そのまま説明文のように展開してくれた人もいるし、そんなことお構いなしに自分の想像の世界をどんどん広げてくれた人もいる。

君たちはすでにそこで、説明的考え方の癖でいった人と、思いつき想像してドラマチックな世界にいった人と分かれるんだね。さあ、みんなはどうだった？

今、4つにしか分けてあげられなかったけれど、もしかしたら、⑤型、⑥型が出てくるかもしれないよね。でも、今

大事なことは、みなさんが、そういう考えの向け方をしたんだということなんです。両方の世界を自由にできたら楽しいだろうなと思う人、手を挙げた。(半数以上の子が挙手)

もしも、この両方の世界が自由自在にできたら、先生だって楽しいと思うんだけど、今回おもしろいと思うのは、みんなが無意識にそうしてしまつたっていうことなんだね。自分がどっちに意識を向けたのかということに気がついてくれたら、今回、想像文を書かせた先生のめあてを一つ達成したことになるんです。

今度、もう一度説明文の世界に戻らなければなりませんから、そつちの方でまたみなさんの意見を聞かせてください。
 今日の授業は、これで終わります。

※太字部分は、この授業を展開する上でポイントとなった発言である。

5

読むとついでに
 (無意識の意識化)

「意識の『意』』というのには『心』のことで

あり、『識』というのは『つかまえること』である。自分の心がどう動いているかをつかまえることが『読む（詠む）』ということであり、私自身の意識がどういうものであるかというのが分かることが『読む（詠む）』ということである。」

この言葉は、本研究会主宰上原輝男が述べたことである。そしてさらに、「読む（詠む）こと」と「書くこと」が表裏一体であるとも考えたい。まず、次のような図を見てほしい。

読みA : 読み手が本文の情報（キーワード）を客観的に正確に理解すること
 読みB : 読み手が自分の想像を働かせて感じとること

児童	予想される「読み」の姿
C 1	A 100%
C 2	A 100% + B
C 3	A 75% + B
C 4	A 50% + B
C 5	A 25% + B
C 6	A 5% + B

C 1の読み方をする子どもは、キーワード（「肉食恐竜」「草食恐竜」「せきつい動物」などの化石）をもとにして、主観的な判断や感情などを入れずに想像文を書くことができる。

C 2は、それらのキーワードをしつかり取り上げ、さらに想像力をふくらませて書くと予想できる場合である。

以下、Aの数値が下がってくるにつれて、キーワードへのこだわりが少なくなっていくと考えられる。

さて、想像文を教材にする目的が何であったかという点、「子どもが自分の読みに気づくため」であった。「自分は筆者の文章のどのような点に意識を向けて読んでいたのか、また、どんなことに関心が向かなかったのか」ということに気づくことである。そこで、文章を読む上での自分の基本的な構え方を知ることができると考えたのである。ただ、ここで注意したいのは、どの「読み」が優れているかという評価をしないということである。なぜなら、「読む」とは、「自分の無意識に気づく」ことであり、そもそもこの授業を計画したのは、このような「無意識の意識化を図ること」だったのである。

6
「無意識の意識化」は説明文の指導目標となり得るのか
「要旨」とは何か

この授業では、「読み方・書き方の意識付けをすること」と「説明文の要旨をとらえる

こと」という二つの活動とめあてが混在している分りにくいところがある。この二つのつながりを言うと、「読み方と書き方の意識づけを図ることによって、自分の読み方に意識を向けることができれば、筆者の論の展開を考える構えを作ることができるだろう」ということである。

要旨とは、読者が、筆者と文章の中で対話しながら形作られてくる一つの世界観（見方・考え方）のようなものだと考えられる。筆者の想像の世界（想像文）と読者の想像の世界（想像文）がある。筆者は、その想像の冒険から一つの世界観を示し、そこから筆者の要旨が生まれる。そして、読者である子どもも、同じようにして一つの世界観を示し、それが、読者の要旨となる。二つの要旨が全く同じような内容になることもあるだろうし、読者の要旨が筆者の要旨と比べて内容的に貧しく感じられることもあるだろう。しかし、逆に読者の要旨が、筆者の要旨に比べて、内容的にさらに深みのあるものとなったとしても不思議はない。

説明文には、いろいろなタイプがある。「マニユアル的でまさに説明的な説明文」「事実と意見がバランスよく混在する説明文」「筆者の意見や主張を中心にした説明文」「想像性豊かな説明文」（今回の教材）などである。

みな同じ説明文という範疇にあっても、読者は、それぞれ違った構えで読まない、その内容や主張を十分理解できないだろうし、結局読解できないことになってしまう。マニユアル的説明文を、想像性豊かに読ませて、果たして正確に内容把握ができるだろうか。

文章にも、さまざまな形と内容があつて、それに応じて読み手の構えを変える必要があるのである。「無意識の意識化」は、そのきつかけを作る大切な活動である。

7 児童の反応

今回の授業で、C1「A100%」の読みを示した(想像文を書いた)児童は一人もいなかった。さらにつけ加えれば、いわゆる「条件無用(貧しい読み取り)型」の想像文を書いた児童も一人もいなかった。

そもそも、教材「日本の恐竜時代」は、単なる情報伝達的な説明文ではなく、筆者の研究活動と思想をもとにした、とても科学的で、しかも想像性豊かな説明文だったということが、その理由であろう。

また、「読む」ということは、それぞれの子どもたちが主観や想像を抜きにしてでき

いことなのだとも言えるかもしれない。

要旨については、「人類が絶滅しない方法を考えなければならぬ」とか「人類は平和を守るためにお互いに協力し合う必要がある」などと、「地球の未来を考える」という文中の言葉を、より具体的に深めているものも少なからずあつた。あえて、「地球の未来を考えるとはどういうことだろうか？」などという発問をしなくても、すでに想像文を通して「生命の大切さ」「自然の大切さ」を感じ取っていた児童もいるということである。

想像文のタイプ別人数(合計39人)

条件無用型(貧しい読み取り型)	0人
条件無視型(自己中心的な読み取り型)	2人
条件ふくらまし型(豊かな読み取り型)	15人
条件忠実型(正しい読み取り型)	22人

それぞれの児童の要旨

教材文の中の

「松田さんの発見などをきっかけにして、日本国内でもたくさんさんの化石が発掘されるようになった。」

に続く文章を考える形で記述した。

そのおかげで、いろいろな恐竜の種類や当時のかんきょうなども分かり、地球

の未来・過去なども分かる。さらに、人類の絶滅をさせない方法も少しは分かるだろう。(資料①の児童)

それらの化石から、中生代、当時のかんきょうや様子、恐竜のなどが分かる。と同時に地球の未来を考えると、手がかりになる。(資料②の児童)

今までの化石で分かることは、たくさんあるけれど、これからもどんどん発見すれば、当時のかんきょうがもつと分かって、恐竜の行動はんいが分かって思う。そして、そこから分かることで、地球の未来を考えなければならぬと思う。(資料③の児童)

そして、それらの化石から、恐竜たちがはんえいしていた当時のかんきょうやかれらのぜつめつの原因を調べることができると同時に、地球の未来を考えると、化石は大事な手がかりになる。(資料④の児童)

恐竜の時代を想像しよう 〈想像文を書く〉

実施日 平成十五年七月一日(火)

実施校 学習院初等科五年生

(東京・学習院初等科教諭)